

乳切歯に用いるCRJの種類と工夫点

○山口昭一、浜野良彦、下飛田道子、小田 博、
椿山園美、福重真理子
オクト・ピド・グループ (福岡市)

我々は、第7回小児歯科学会九州地方会において、子供の乳歯の審美性に関する保護者の意識調査をおこなった。その結果、齲蝕治療において審美的な修復を望む一方で、脱落しにくい治療への要求も強いことがわかった。また、このような要求は、乳切歯の歯冠修復においてより顕著であった。

一方、conservativeな窩洞形成理論が提唱され、可及的に健全歯質を残そうとする試みがおこなわれており、我々はこの理論に基づき乳臼歯隣接面齲蝕に対してT字型窩洞形成をおこなっている。

そこで、今回乳切歯歯冠修復に関して、conservativeな窩洞形成理論を考慮し、治療法に対する工夫をおこなった。

コンポジットレジン接着力の増加にもかかわらず、乳切歯歯冠修復で隅角部を含んだり、あるいは歯質の欠損が大きい場合には、修復物の脱落、破折に遭遇することは少なくない。このようなケースでは、維持形態の付与あるいは拡大の後再充填をおこなうのか、コンポジットレジンジャケット冠 (以下CRJと略す) にするのか、迷うところである。ただ、CRJは、審美性の回復や修復後の予後という点では良好であるものの、歯質の切削量が増える欠点があり、症例による適用は意見のわかれるところであろう。

そこで、今回乳切歯歯冠修復法で、CRJに関して、歯質の欠損の状態により歯質の切削量を減らしたCRJの修復法の工夫と症例別の分類をおこなったので報告する。

乳臼歯根分岐部病変への対応について

瀬尾令士、岡本佳明、馬場篤子*、本川渉*、
医療法人皓奏会瀬尾歯科医院
*福岡歯科大学小児歯科学講座

現在、厚生省並びに日本歯科医師会によって推進されている8020 (一乳幼児から高齢者まで) の運動に象徴されている如く、高齢時により多くの歯牙を確保し、物を噛み、味わうことのできるように永久歯歯牙の保護を進める運動が展開されている。我々にとって、乳幼児期にあって、しかも、人の口腔内に最初に萌出し、成長発育に大きく関わりを有する乳歯及び、乳歯歯列を可及的に保護し、その使命を全うさせるべき努力を講ずることは極めて重要である。ところで、日常の小児の治療の中で、最も厄介で、然も頻繁に認められ、且つ、難治性の疾患の一つに、根分岐部病変が挙げられる。最近、乳臼歯歯根髄床底部、及び、分岐部に関する電顕的、ならびに光顕的レベルでの病理組織学的報告はよくみられるものの、臨床的対応に関する報告は稀である。今回、演者らは、乳歯の解剖組織学的、且つ生理学的な特異性を考慮しながら乳臼歯根尖分岐部病変の治療と、乳臼歯の延命効果を高める目的で、当院を受診した4歳8ヵ月~7歳11ヵ月までの患児で、頬側歯肉部に膿瘍を有し、口内法X線写真において、分岐部付近に病変を思わせるX線透過像の認められた乳臼歯に対して、1) 感染歯髄への根管処置、2) 髄床底部への保護処置、3) 分岐部及び分岐部歯周組織への処置を施した後。その後、臨床的且つX線学的な経過観察を行った結果現在まで良好な治療経過が認められたので、その概要について報告する。